

---

# へたりあようちえん。～世界がもし一つの幼稚園だったら～

陸点

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

へたりあようちえん。く世界がもし一つの幼稚園だったら

### 【Nコード】

N68550

### 【作者名】

陸点

### 【あらすじ】

超エリートエージェントのコスモスの次なる任務先は 幼稚園！？ しかもその幼児たちは何故かヘタリアキャラにそっくりで……！？ ヘタキャラ全員幼児化！ ロリショタパラレルぐだぐだコメディです。

転勤先は、幼稚園（前書き）

コスモスさん幼稚園に左遷されるの巻

## 転勤先は、幼稚園

「コスモス。君をここに呼んだのは、他でもない、君にしかできない仕事があるからだ」

とある国のとある会社のとあるオフィス。そこに勤める一介の会社員である私は、暗い部屋、ブラインド、高級そうな家具、といかにも社長室っぽい社長室に呼び出されていました。

「君にはしばらくの期間、ある要人たちの護衛をしてもらいたい」  
社長室の主、つまりは社長であるボス（本名は知りません。ここは私を含め大抵の方が偽名を使うのです）が、顔を絶妙な陰で隠しながらそう言いました。

「『しばらくの期間』とは、どれ程の期間なのですか？」

「わからん。先方は、『なるべく長い期間』とは言っていたが、具体的な指定はしなかった。まあ、君ほど優秀なエージェントならば、どうしても融通ができるだろう」

まるで答えになっていません。あと、人がせっかく秘密っぽい感じを出そうとしているのに、軽々しく『エージェント』とか言わないでください。

「わかりました。では、護衛する要人とは、どういった人物なのでしょう？ 複数人いるのはわかりましたが……」

こういう仕事を請けるとき、確認を怠ってはいけません。前に確認し忘れて、三ヶ月もの間ある絶滅危惧種の群れ、総勢七百頭を密猟者から守りきるという壮絶な仕事を請けてしまったことがあります。給料はたっぷり貰えましたが、あんな仕事はもうこりごりです。

「幼稚園児、だ」

「……………、え？」

一瞬、ボスが何を言っているのかわかりませんでした。幼稚園児？ キンダーガートナー？

「君が驚くのもわかる。何しろ今までに請けた要人護衛の中でも最

年少だからな。だが、これはとても重要な仕事だ」

「……どういう、ことでしょうか」

「ニホンのトウキョウに、世界各国の要人の子や孫のみを預かる幼稚園が存在する。ゆくゆくはその国の未来を担う人材だからな。一ヶ所に集めて英才教育をしようという話らしい」

それだと逆に、テロリストに狙われやすくなるような……。一步間違えれば外交問題になりかねません。

「だからこそ、君が呼ばれているんだろう。今までは先方でどうにかできていたそうだが、ここ最近は手に負えなくなってきたそうだ。そこで、優秀なエージェントの若い女性を保育士として提供してほしい、とのことだ」

「……私を優秀なエージェントとして認めてくださっていることはとても嬉しいのですが……残念ながら、この仕事は請けられません」

私は子どもが苦手です。とりわけ、大人の言うことを聞かず遊び暴れ回るような年齢の子どもは、想像するだけで疲れてしまいます。それなのに、私に子どもの面倒を（たとえ、形だけでも）見るだなんて！

「ああ、君がそう言うと思って、既に請けさせておいたよ」

どんつ　と、ボスが分厚い書類をデスクの上に投げました。

一番上には、短い文面の書かれた契約書。

『私、コスモス・ストレージは、無期限でこの仕事を請けることをここに誓います』　ご丁寧に、書いた覚えのないサインとともに

！

「な、え、あ　？」

「バッドラックだ、コスモス」

茫然とする私の肩をぽん、と叩き、ボスは部屋から出ていきました。

「……理不尽にも程があります……」

……こうして、大変不本意なことに、私ことコスモス・ストレージは、ニホンという国で保育士の真似事をする運びとなったのだ。

ニホン語よし、保育士免許よし、登録よし、必要最低限の日用品よしと。

登園（保育士側も、この表現でいいのでしょうか）の日の朝、私は当面の間の住居として支給されたアパートの一室で指差し確認をしていました。

なんにしても確認だけは怠ってはいけません。それが私の信条なのです。

怠るということは油断であり、油断は失敗に繋がります。私が普段やるような仕事には失敗が許されないので、日頃からこうやって習慣付けているのです。

一通り確認が終わり、ニホン語の発声練習をし、その他諸々（食事等）を済ませ荷物をまとめ、いよいよ出発です。

と、いけないいけない。大事なものを忘れていました。

クローゼットの中からエプロンを取り出し、きちんと身につけます。

やっぱり、保育士さんといえばエプロンですね。

そうして私は玄関のドアを開け、異国の幼稚園へ向かうべく足を踏み出しました。

……………数歩歩いて、まだエプロンで出歩く必要はないと気づき、慌ててエプロンを鞆の中へしまったのは、オフレコにしてください。

## 転勤先は、幼稚園（後書き）

と、いうわけで『へたりあようちえん。』もしも世界が一つの幼稚園だったら』が始まりました。

まだプロローグで、ヘタキャラは誰も出演してないけどな！

本作は別作品の学園モノとは別に、コスモスさんというオリキャラ主人公の一人称で語っていきます。

最初は普通の幼稚園モノの予定だったんですが、面白がってコスモスさんに色々設定を付け加えていったらあんなことになりました。どうしてこうなった。

機会があつたらコスモスさん主人公のオリジナル作品を書きたいですね。

次回からはいよいよ幼稚園で、幼児化したヘタキャラがですよ、多分。

“要人の幼児”というダジャレは使わなくて本当によかった……。

アクの強そうな子どもたちですね……（前書き）

コスモスさん個性豊かな園児にびびるの巻



アクの強そうな子どもたちですね……

「……というわけで、今日からここで働くことになりました、コスモスと言います。まだ色々と慣れていませんが、どうかよろしくお願いします」

家を出て数十分後。私は幼児に囲まれていました。

世界各国の子どもたちを集めたとあって、髪も眼も肌も様々で、まるでここだけニホンではない別の国のようです。

「（ちよつと、コスモスさん。子どもたち相手に堅すぎるわよ）」

隣の小藤先生（私より二、三つ先輩の先生で、園長先生からはこの人を頼るように言われました）が、小声で注意してきます。

「（はあ。なにぶん、こんなにも小さな子どもたちと会話したことがないもので……すみません）」

「（……あなた、本当にイギリス人？　ずいぶん日本語ができるのね）」

「（ありがとうございます）」

小藤先生とひそひそ話に花を咲かせていると、子どもたちの方から声が上がりました。

「ねえ、コスモス先生は前はどこで働いてたの？」

見ると、そこには金髪碧眼で、分け目にぴょんと出たくせ毛と好奇心の強そうなくりくり眼が特徴的な男の子が。

「えつと、君は……」

「アルフレッド。アルフレッド・ジョーンズだよ」

にこつと微笑んで答えてくれるアルフレッドくん。長いので、アルくんと呼びましょう。

しかし、どう答えたものでしょうか。“エージェント”だのなんだのがこの年頃の幼児にわかるとは思えませんが、そもそも自分たちが“守られる対象”だということも、恐らくはわかっていないでしょう。

ですから、ここはあえて抽象的に答えることにしました。

「悪い人をやつつけて、弱い人を助ける正義の味方をしていました」  
そう答えると、子どもたちが「おお……」とどよめきます。特にアルくんは眼をキラキラと輝かせました。

「すごい！　ねえ先生、正義の味方ってどうすればなれるの？」

一瞬、「なれねーよ！　スーツアクターにでもなれ！」などと意地悪を言おうかと思いましたが、そこは抑えて、笑顔笑顔。

「好き嫌いなくご飯を食べて、よく寝てよく遊べば、なれますよ」

今度は「ええ……」という声。駄目ですよ、好き嫌いはなくさなきや。今はよくても、大人になったとき色々と不便しますから。

「ねえ、先生の好みのタイプは？　できれば、スリーサイズも教えて」

……ずいぶん、ませた質問が来ましたね。誰でしょう、声の主は少し探すと、アルくんから少し離れたところにいる、さらさらした金髪で整った顔立ちの彼がそうだとわかりました。

「（フランススくんよ。あんな可愛い顔なのに、平気でセクハラしてくるから、気をつけてね）」

小藤先生が耳打ちで名前を教えてくださいました。それにしても、イタズラではなく、セクハラですか。確かに厄介そうです。

「好みのタイプは、頼り甲斐のある、安心して背中を預けられる人ですね。スリーサイズは、秘密です」

「じゃあ、当ててあげようか。上から、69ぐはあッ！」

フランススくんが私のスリーサイズを言おうとしたとき（恐ろしいことに、バストは完全にあっていました）、突然横からフライパンのようなものが物凄い速さで投げつけられました。

「フランスス！　てめえ女の人になに訊いてんだよ！　このボケ！」  
どうやら、フライパンを投げたのは、長めの茶髪を縛った勇ましい顔つきのあの子ようです。

「いてて……なにするんだよ、エリザ」。俺の顔が変になったらど



アクの強そうな子どもたちですね……（後書き）

と、いうわけで『へたりえん。（今思いついた略）』の第二話（実質第一話）です。

書いている途中でキャラが不足していることに気づき、慌ててオリキャラとして出したのが小藤さん。苗字なのか名前なのかよくわからない彼女はこれから一体どういう運命になるんでしょう。

案外ヘタリア好き（腐女子）で子どもたちの言動に一々萌えてるのかも。

どうでもいいですね。

やっと幼児化ヘタキャラ出せましたよ。いやあ、これ書いたの实质一日なのに妙に長く感じました。

ところで、アメリカとかハンガリーさんとか、幼少期と現在のキヤラが違う人は扱いに困りました。結局、幼少期を優先しましたが、多少なりとも現在への伏線というか片鱗を出していきたいです。

そういえば、元からちびキャラなシー君やワイちゃん、色々と微妙な立場の神聖ローマはどうしよう……？

ヘタリアってなんですか？（前書き）

コスモスさん腐女子に引くの巻

ヘタリアってなんですか？

子どもたちへの紹介が終わった後、私は小藤先生に幼稚園を案内してもらっていました。

ここが年長さんの部屋、ここが年少さんの部屋、あっちが集会所、そっちが食堂といった具合に、幼稚園の大まかな造りを次々に頭に叩き込んでいきます。

「で、ここが職員室ね、さつきも来たけど。机の場所はもう覚えてた？」

頷くと、「……あなた本当に飲み込みが早いわね……」と呟き、小藤先生は私ではない机の前で立ち止まりました。無数の漫画本やアニメのようなイラストが表紙の小説がうず高く積まれたそこが、どうやら彼女の席のようです。

ただ、少し気になったことは　その漫画や小説の表紙のイラストに、やけに男性が抱き合ったり見つめあったりしているものが多いことです。

「ああ、これ？　BL本よ。私、“腐女子”なのよね」

私の視線に気づいたのか、小藤先生が謎の単語を交えて説明してくれました。

「……“フジヨシ”、とはなんですか？」

「あ、そっかまだ日本に来たばかりだから知らないのね。男同士の恋愛、いわゆるBLをこよなく愛する女の俗称よ。男同士の恋愛、いわゆるBLをこよなく愛する女の俗称よ。“腐った女子”って書いて、婦女子と掛けるのよ。掛け算だけにね！」

何か上手いことを言ったみたいですが、正直私にはよくわかりませんでした。

「つまり、ホモセクシャルな男性がお好きなんですね」

「うーん、間違っではないんだけど、ニュアンスがねえ……。まあ、深く考えなくていいわ。どうせヤマもオチもイミもないんだから」

自分で言った言葉にくすくす笑いながら、小藤先生は「そういえば、」と本の山から大判の漫画本を引っ張り出しました。

「この漫画、知ってる？ ヘタリアっていうんだけど」

その漫画本の表紙には、三人の男性が軍服らしき服装で、それぞれポーズをつけて並んでいる絵が描かれていました。私は漫画やイラストには詳しくないのですが、背景やアクセントとして描かれたパターンがポップで可愛らしかったです。

「いえ、私はあまり漫画を読まないの……」

たまに読んでも『ピーナッツ』みたいなかなりデフォルメされたものが、アメコミのようなリアルな絵柄なものしか読んだことがありません。こういう日本独特の“OTAKU”的な絵はちよつと苦手です。

そういった旨を言葉を選んで伝えたと、小藤先生は少し残念そうな顔をしました。

「そう……。まあ、漫画をよく知らないなら、しょうがないよね」

そして、小藤先生が“ヘタリア”について教えてくれました。

国家を擬人化（思えばとんでもない発想ですが、ニホンではそう珍しいことでもなく、他にも食品や駅などを擬人化したアニメもあそうです）した漫画で、例えばイタリアはナンパ好きのヘタレ男、ドイツは真面目で厳格、ニホンはミスティアスで謙虚といった、ある種ステレオタイプなキャラクターが沢山登場するのだそうです。魅力的な男性キャラクターが多いことからフジョシに人気が高く、しかし女性キャラクターも非常に愛らしく最近是多方面から注目されているのだとか。

ですが、なんでこんなことをいきなり？

「実はね……この幼稚園の子たち、ありえないくらいヘタリアのキャラにそっくりなのよ!!」

小藤先生が突如絶叫しました。私もふと、「な、なんだってー!」と叫びたくなりました。

「そうなんですか。それはびっくりですね」

「あれ、意外に反応薄い！？　だつてあれだよ、漫画キャラにそっくりな幼児がこんなに近くにいるのよ！？　新手のスタンド使いよ！？　ウンガロとアレツシーで挟み撃ちのかたちになったのよ！？」  
興奮しまくし立てる小藤先生。残念ですが、やっぱり私にはよくわかりません。

「まあ、確かに凄いい偶然だと思いますが、個人的には『だからなんなんだ』と言いたいですね」

「ここにきてコスモスさんテラ冷たい！　まるで私が馬鹿みたい！」「え、馬鹿じゃなかったんですか？　すみません、誤解してました」「何故会つて数時間の人間にここまでの毒舌を！？」

おっと。いけないいけない。ついいつもの癖で他人を罵倒してしまいました。謝らなくては。

「すみません。なんだか場の流れがおかしな方向にいきそうだったので、小粋なアメリカンジョークで和ませようと思ひまして」

「え？　イギリス人じゃなかったの？」

「間違えました、イングリッシュジョークです。ブリティッシュジョークでも可です」

「なんかさりげなくイギリスを敵に回しそうな発言ね……別にいいけど」

やれやれ、どうにか誤魔化せました。

「まあ、キャラクター云々はともかく、一度読んでみて？　面白いし、性格もそっくりだから勉強にもなるし」

小藤先生が先ほどの漫画本と、さらに表紙がちがうもう二冊を重ねて私に渡しました。シリーズものだったのですね。

「はあ、時間を見つけて読んでみます。なるべく早く返しますね」

「ああ、いいのよ。それはあげる。布教用のだから」

「布教？　小藤先生は伝道師だったのですか？」

「オタクと腐女子はいつだって、萌えの伝道師なのよ！」

「……意味がよくわかりませんが、ありがとうございます」

こうして私はヘタリアを知り、小藤先生の人となりをなんとなく



理解しました。

後々この出会いが、私を東京ビッグサイトという戦場へ無理矢理導いていくことになるのですが、それはまた別のお話です。

ヘタリアってなんですか？（後書き）

というわけで『へたりえん。』第三話です。

またヘタキヤラ出なかったよ！

今回は普通に幼稚園とヘタリアの紹介をする予定だったのですが、なにがとち狂ったのか小藤さんの腐女子回になりました。

小藤さんは明るく健全な腐として描いています、多分。私の「こういう腐さんなら仲良くなりたい」像を反映しています。

いや、実際本物の腐さんと出会ったことがないんですね。ツイッターでお話したことはありますが。

なにが彼女たちをBLへと導いているんでしょうか。知りたくもあり、知りたくもなしです。

そんなわけで、当小説は感想・リクエストと共に腐さんのご意見を募集しています。

BLは書かないので（というか、書けません。精神が持ちません）、そちらの意見は取り入れられませんが、腐女子はこう考える、こういうシチュエーションならば萌える、などのご意見を参考にさせていただきます。

……なんか小藤さんの話からえらい方向に話がずれたな。まあいいか。

とにかく、今後とも当小説を読んでくださったら幸いです。

楽……園……？（前書き）

コスモスさんSに目覚めるの巻

楽……園……？

さて。今はおゆうぎの時間。園内の少し手狭なお庭で、たくさん  
の子どもたちが遊びまわっています。

ただ、その遊んでいる内容が……。

「ロヴィーノー、コンキスタドルごっこせえへん？ 俺ピサロな  
！」

「えー、俺そんなのやりたくないぞこのやろー。もつと面白いのな  
いのかよー」

何をどうするごっこ遊びなのか字面からはさっぱりわかりません。  
禍々しい響きはするのですが。

「パンダいらんかねー、この幸せのパンダを買えば幸せになれるあ  
るよー」

「そ、そんな悪徳商法に騙されるかよ！ 騙されねえぞ……」

園内で物を売り買いしないでください。ていうか、そのパンダ、  
ぬいぐるみですね？ ワシントン条約には引つかからないですよ  
ね？

「……ニコニコはすっかり変わってしまいましたねえ。キワミとか  
ウマウマとかで盛り上がっていたあの頃が懐かしい……」

「菊の起源は俺の国なんだぜ！ だからこのパソコンも俺がもらっ  
んだぜ！」

「やめてください！ そんなことをされたら私、明日からどうやっ  
て生きていけばいいんですか！？」

園内にノートパソコンを以下略。カツアゲもやめなさい。あなた  
の国にはサ スンがあるでしょうに。

本当に好き勝手に暴れ回る園児たち。こっいつのを“野放図”と  
か“地獄絵図”とかいうんでしょうね。

そっいえば、小藤先生はこれについてどう思っているんでしょう  
か。ふと気になり、小藤先生のほうも見てみました。

「ら……らく……ごふつ、らく、楽園みたいやんなあ……ぐへへ」  
……う、うわあ……。

小藤先生は……なんというか、眼の焦点が合わず、涎を垂らし、お茶の間の皆さんにはとても見せられない醜態を晒していました。なんか喀血しましたし。

「こ、小藤先生？ 大丈夫ですか？」

かなり声をかけがたい、というか声をかけたくない姿でしたが、まあ展開的に声をかけるべきかなと思ってかけてみました。

「え、ああ、大丈夫よ。ここの子どもたちの可愛い姿を見ると、つい、ね」

ずびびび、と涎を吸い上げる小藤先生。拭いたほうが確実に早いと思うのですが。

「本当……ここの子どもたちびっくりするくらいヘタキヤラにそっくりで……そんな子どもたちが目の前で遊んでいるのかと思うと、嬉しくて嬉しくて、本当に楽園みたい……」

またもや麻薬中毒患者のような顔になる小藤先生。何この人怖い。「わ、私は子どもたちの様子を見てきますねっ」

無理やり笑顔を作り、なるべく自然な速さで小藤先生から離れました。あのまま一緒にいると、なにか人として越えてはいけないう線を越えてしまいそうな気がしたので。

私は小藤先生との付き合い方を真剣に考えるべきなのかもしれないません。

まあ、とりあえず、宣言通り子どもたちの様子を見てみましょうか。

と言っても……怪しいごっこ遊びや物品売買インターネットカツアゲと、やっていることはさっきとあまり変わっていませんね。

……おや？

お庭の隅の垣根で、何か探しているのでしょうか？ すすり泣きながらしゃがみこんでいる子がいます。

「どうしたんですか？ 何か、落とし物でもしたのですか？」

近寄り、声をかけてみました。顔はよく見えませんが、スモックに青いズボンを穿いているので、男の子なのでしょう。

その男の子が振り返ります。明るい茶髪のラテン系で、一本だけ跳ねた毛が特徴的な、一見女の子と間違えそうな顔つきの子でした。細めた眼からは大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちます。

「うう……あのね、ボク、ルートとボール投げしてたんだけど、ボクが変なところに投げちゃったから、ボールが無くなっちゃったの……」

男の子から少し離れたところには、ゲルマン系金髪碧眼の別の男の子が、ばつが悪そうに立っています。

「俺も探すって言ったんだが、フェリシアーノが一人で探すといつて聞かないんだ……」

なるほど。大体わかりました。

フェリシアーノ君（長いからフェリ君でいいですよ）とルート君がボール遊びに興じている際、誤ってフェリ君が見当違いの方向に投げてしまい、ボールがどこにいったかわからなくなったみたいですね。

「そのボール、どういうものなんですか？」

「え……ああ、バレーボールぐらいの大きさで、猫の模様が書かれていた」

可愛らしいデザインですね。てっきりこの子たちのキャラの濃さ的に、一面に白旗とかパスタとかジャガイモとかそんな模様かと思っていました。

「わかりました。それでは先生も一緒に探しましょう」

「えっ、でもボクが「お黙りなさい。貴方一人だけで探して見つかるはずがないでしょう？」現実を見据えてから駄々をこねなさい。いいですね？」

……恥ずかしい話、私、フェリ君みたいに男で泣き虫な子が嫌いなんですよね。別に『男だからシャキツとしなさい！』なんて言うつもりはないんですが、いくら泣いたところで目先の問題は変

わらないでしょう？

だから、これはフェリ君への当てつけであって、別にフェリ君の泣く姿にSの血が目覚めたわけではないんですからね。

「……………」

私の言葉に怯んだのか、泣くのをやめきよとした顔でこちらを見てくるフェリ君。が、もうこの際どうでもいいです。

「というわけでルート君、貴方も探してください。それから、あっちのほうで遊んでいるトマトが好きそうなラテン系の二人と、パンダ売ってるアジア人とそれを買いたいようになってるアルビノ、パソコンを取り合ってるアジア人二人も暇そうだから手伝わせない。人海戦術です」

「あ、ああ……」

「返事は『はい』、でしょう？」

「は、はい……」

「よろしい」

そうして、ボール搜索大作戦は始まりました。

ルート君に指示して集めてもらった子たち以外の暇そうな子にも手伝ってもらい、庭中を探し回りました。

そして、三十分後。

「先生、あった！ ボールあったよ！」

人海戦術の甲斐もあり、どうにか件のボールを見つけることができました。見つけたのがフェリ君ということがいまいち釈然としませんが。

「良かったですね。きっと、手伝ってくれたみんなのお陰ですね」

「うん！ みんな、ありがとう！」

手伝ってもらった子たちに次々と頭を下げていくフェリ君。あの手慣れた感、将来小物になること間違いなしでしょう。

「気にせんでもええよ、このくらい」「もうなくすんじゃないぞ、このやろー」「次は気をつけるあるよっ」「また困ったことがあったらいつでも俺様を頼ってくれよ、ルート、フェリシアーノちゃん

！」「見つかつて何よりでしたね」「ボールの起源は俺の国なんだぜ！ だから次は俺も誘うんだぜ！」

てんでんばらばらに返しながら戻っていくその他の子たち。またあの不毛なやりとりを繰り返すのでしょうか。

「ともあれ、見つかつて本当に良かったですね、フェリ君、ルート君」

「うん！」「ああ」

それはそれは嬉しそうに頷くフェリ君と、ぶっきらぼうに見えて実は微笑んでいるルート君。やっぱり子どもは笑顔が一番ですね。泣き顔は似合いません。

「そうですね。せっかくですからボール遊び、先生も混ぜてくれませんか？」

私の唐突な提案に、きょとんとした顔になる二人。が、それも寸間の間のこと。すぐに頷いてくれました。

「はいっ！」「」

本当に、子どもは笑顔が一番似合いますね。

あ、いや、これは私がただ純粹にボール遊びをしたくなっただけであんな面倒なことをしただけで、べ、別に二人の笑顔が見たかったわけではないんですからねっ！？

“つんでれ”とかなにかではなくて！



楽……園……？（後書き）

長っ。

今回長っ。

そんなわけでへたりえん第四話です。いよいよコスモスさんの隠されし一面が姿を見せてきました。

今回、たくさん新キャラが登場しましたが……あまり説明する必要ないですね。びっくりするほど話し方で判断できますし。

強いていえはフェリとルートでしょうか。

フェリはまんまちびたりあです。でもスモック（しんのすけが幼稚園でよく着てるアレ）で男女の区別がついてしまうので、女の子に間違えられるエピソードは出せないっぽいです。あ、でも演劇会とかの行事で女装させたりしてもいいかも。

ルートは……ドイツ＋神聖ローマ÷2みたいな感じです。正直、個人的には神羅とドイツは別人だと思ってるんですが、幼少期のドイツがあまり想像できないので神羅で補ってみたりしてます。神羅もいずれ出したいんですが……どうしようかな？ あ、他人に気圧されるルートは書いてて楽しかったです。

解説しなかった他の六人は大体原作通りです。起源の子が愛国精神を発揮してたぐらいですね。

あとは……コスモスさんのスペックの解説かな？ でも需要あんのかなこれ。まあいいや、やっちゃえ。

ウェーブがかった赤毛のロングヘア。目は藍色。茶色いフレームの眼鏡着用。スタイルはかなりのもの、特に胸が大きい（ここ重要）。国籍はイギリス。だから（隠れ）ツンデレ。でもDS。紳士ではないので眉毛は普通。妖精は見えない。

こんな感じですかね。だからなんだって話ですが。次回のあとがきでは小藤さんの意外なハイスペックを紹介したいと思います。

えーと、あとは……ああ、そうだ。

この小説でのヘタキヤラは人名で登場してるんですが、人名がない人はどうしましょうかね？ やっぱり仮人名を作るしかないんでしょうか。

ウクライナさんやりヒはライナさん、リヒテンで通ってますが、それもありしっくりこないというか……リヒテンシュタインは苗字ですし、ライナさんはもう他のヘタ小説で使ってるので、あまり使いたくないんですね。

とかなんとか考えながらプロ竹見てたらなんじゃこりゃーっ！？  
もう既に沢山の方から可愛らしい名前の候補が！？

イルーニャ！ ソフィヤ！ アネルセン！ ルーカス！ エミー  
ル！ ゴヴェルト！ マキシム！ ツーツィア！ ラルフ！ 嘉龍  
！ レオン！ 乙伶！ イルーニャ！ ソフィヤ！

思わず連呼するほどテンション上がりました。特にウクライナさんの名前マジ可愛い。可愛すぎて選べん。ひまさん、頑張って決めてください。w k t k が止まりません。

そんなわけで、今回も読了ありがとうございました。またお会いできたら幸いです。

## 箸とフォークとスプーンと（前書き）

コスモスさん箸に敗北するの巻

## 箸とフォークとスプーンと

お庭で目一杯遊んだ後は……お昼ご飯の時間。

今日のメニューは白米と鯖の味噌煮とコーンサラダ。びっくりするほど和風なメニューですね。

当然、食べるにはチョップスティックス、つまり箸を使うわけですが……。

……どうしましょう。全然、物が摘まめません。

ああもう！ イライラします！ 大体なんで箸を発明した人は、こんな細い棒二本で物を掴もうと思ったんですかね！？ フォークで刺すとかスプーンで掬うとか他の選択肢はなかったんでしょうか！？

「こ、コスモスさんっ？ 箸が上手く使えないなら、フォークを使ってもいいんですよっ？」

隣に座っていた木蓮先生（小藤先生と同じく先輩の先生。ただし、小藤先生より“少し”歳上だとか）が泣きそうな顔でそう言いました。初めて見た時は思わず「何か悩みでも？」と訊いてしまいましたが、どうやらこの人は生まれつきこういう困り顔のようです。

「いえ、こればかりは私のプライドが許せないんです。私、これでも物覚えが良い方だという自負があつたんです。それなのに、その私がたつた二本の細い棒に敗れるなんて……ッ……！」

「な、なんでたかが箸にそこまでっ！？ ほ、ほら園児たちもフォークとか使ってますし……ねっ？」

そりゃあ、みんなフォーク使ってますけど……。

「あの子たちは子どもでしょう。食事に箸を使わない地域の子です。それに、東アジア圏の子たちはちゃんと箸を使ってるじゃないですか」

「なんでその言葉を自分に当て嵌められないんですか……っ？」

ほら、子どもたちも見てますしっ、と無理矢理木蓮先生に先っぽ

がフォークのようになった、不思議な形状のスプーンを握られま  
した。く、屈辱です……。

腹立ち紛れにご飯をスプーンでザクザク刺していると、ふと気づ  
いたことがありました。

「そういえば、小藤先生は何処へ？」

「小藤さんなら、五分で食べ終えて子どもたちのようすを見に行き  
ましたよっ？」

速っ！

「ほら、あそこっ。イヴァン君……あのマフラーの子と、ちっちゃ  
くて髪がくしゃくしゃのライヴィス君の間に入ってますっ」

見ると、やや大柄の子がご飯を食べながら隣の小さい子の頭を…  
…なんでしょう、なんというか……押さえつけて潰しているよう  
でした。

小藤先生はその二人の間に立って、妙に嬉しそうに「こちら、  
頭をぎゅっぎゅしちや駄目でしょ？」と大柄な子　イヴァン君を  
止めていました。

「あの人、いつもあなんですよ。『目の前にヘタキャラ　も  
とい可愛い子ども達がいるのに、悠長にご飯なんて食べていられま  
せんよ！』と言ってっ」

……小藤先生。貴女の気持ちは私にはいまわかりませんが、  
ご飯くらいは大人しく食べましょうよ……。

「まあ、いつものことですっ。コスモスさんは自分のペースで食  
べればいいですよっ」

「そうします……」

はあ。小藤先生の残念っぷりを見ると、箸とかスプーンとか  
どうでも良くなってきました。食べられればなんだっていいですよ  
ね。

「……そういえば、メニューが思いっきり和風ですけど、子どもた  
ちのほうで文句は出ないんですか？」

今日のは比較的誰でも食べられそうですけど、日本ではデビルフ

イッシュ　タコを食べたり、異様な臭いのする“ナットー”や“クサヤ”なるものを食べたりするそうですし。

「うーん、あんまり文句は出ないですねっ。みんな好き嫌いはそんなにないですしっ。あんまり万人受けしないものは出さないと聞きますしっ」

ほっ……。どうやら、ナットーは出ないようですね。もし出たらどうしようかと思いました。

「むしろ、私たちとしては少しくらい好き嫌いしてほしいぐらいですよ。ほら、見てください、あの金髪で眉毛が海苔みたいな子っ。あの子、アーサー君って言うんですよっ。いつもなんだか真っ黒い何かを持ってきて、それを“スコーン”だって言い張って食べてるんですけど、最近アル君とかギル君とか、他の子にもあげだして……っ」

……うわあ、確かにあれはスコーンです。思いつきり炭化してますけど……。どんな作り方したらあんな焦げ焦げのスコーンが作れるんでしょうね。スコーンは比較的、作りやすいおやつのはずなのに……。

あんなサムシング（個人的にはスコーンと認めたくありません）を作る人がいるから、イギリスはご飯が不味い国というレッテルが貼られるんですね……。ちゃんと美味しいご飯を作る人も（わずかですが）いるというのに……。

「アーサー君やアル君は平気みたいなんですけど、ギル君はあれを食べた後食中毒で入院しちゃって……それ以来スコーン（？）は持つてきちゃいけませんって注意してるんですが……っ」

ギル君……。ああ、あのアルビノの子ですか。あの子、ああ見えて幸薄い子なんですね。不憫です……。

「だがそこがいい。だってそれでこそ普憫だから」

「こっ、小藤先生！？　いつのまに隣に!？」

さっきまでイヴァン君たちの所にいたはずの小藤先生が隣に立っていました。凄く速さです、だってまだあっちのほうに小藤先生の

残像が見えますもん。

「ふふ、ギル君の話題と聞いて思わず飛んできちゃったわ。相変わらずキャラの再現率が高いこと高いこと……」

「またもや涎を垂らしそうになる小藤先生。ああ、この人はきっと幸せなんだろうね。」

「……えーとつ。とにかく二人とも、アーサー君からもらったものは食べないでくださいねっ。お腹壊したら困りますからっ」

「食べませんよ。子どもじゃないんですから……」

「むしろ食べます。アーサー君のプレゼントならなんだって……」

「「食べちゃ駄目ですってばっ！！」」

このあと、謎のテロリスト（笑）によって園内に開封済みのシュールストレミング缶を投げ入れられ、園内が軽いパニックに陥ったりもしましたが、それはまた別のお話、というか次回にお話しましょう。

## 箸とフォークとスプーンと（後書き）

またヘンテコ先生が増えました。へたりえん第五話です。

前回の長さに反省し、少し短くまとめました。

そのせいでキャラが掘り下げられなかつ……げふんげふん。

まあとにかく、今回はあんま解説できるキャラがないので、早々に小藤さん＆木蓮さんのスペック紹介でも。

### ・小藤先生

本名：富士宮小藤。まごうことなき日本人。

髪はによりありの日本に似せた感じ。眼は黒。

一見おしとやかな大和撫子なので騙される男は多いが、本性はあの通りの腐女子。萌えすぎて涎垂らしたり「ぐへへ」とか言っちゃう残念な人。でも美人。胸は大きくはないけど、その方がコスプレが楽なので気にしていない。

腐属性さえ発揮されなければ真面目な人。でも突然萌えシチュを思いついてハアハアしてしまつて周りから変な目で見られる二十三、四歳。特技は古武術。

### ・木蓮先生

本名：白木木蓮。よく付けられるあだ名は『ハクモクレン』か『目目連』。

髪はやや長いストレートを後ろでバレッタで留めている。垂れ気味の眼は暗い茶色。眉毛も下がり気味。

見た目は幸薄そうなお美人。いつも泣き出しそうな顔をしている。でも意外とキレやすい。見た目は誰よりも若いけど、実は年齢は二十代ぎりぎり。“結婚適齢期”という言葉が何よりも憎いお年頃。

今のところ唯一の常識人なので、腐な小藤さん、Sなコスモスさんに囲まれてあたふたしてそう。



昔薙刀でトロフィーをとったことがあったとか。

……ていうかこれ需要あるのかな。 あったらいいなあ。 あつてくださいお願いします。

あ、この作品に出てくるオリジナルキャラの名前はみんな植物からとってます。 一目瞭然ですね。

そして、次回出てくるであろうテロリスト（笑）さん。 この設定覚えてる人いるのかな。

この人はヘタキャラではありません。 ですがオリジナルではなく、れっきとしたひまさんのキャラクターです。 男で女装が似合う傍若無人なあの人です。

これだけで大体特定されちゃうな。 わかりやすすぎる。

テロリストさんは真面目にやると凄い重たいネタなので、その辺はライトにいきたいと思ってます。

この作品はフィクションであり、実在のヘタリア、人物、事件、団体、国家とは一切関係ありません。

そんなわけで、今回も読了ありがとうございます。 またお会いできたら幸いです。

普通テロリストはセーラー服を着用しません（前書き）

コスモスさんテロリストに遭遇するの巻

## 普通テロリストはセーラー服を着用しません

それが起こったのは、みんなが食べ終わり、『ごちそうさまでした』をして食器の片付けをしている最中のことでした。

ガシャン、と突然けたたましい音をたてて窓ガラスが粉々になりました。とっさに私は近くに居た子どもたちを伏せさせます。屈む寸前、小藤先生が黒い髪をおかっぱにした子を庇うふりをして思いつきり頬擦りをしたように見えたのは、まあ、気のせいでしょう。

「そこくうううううううううう」とか聞こえたのも、きつと幻聴です。

子どもたちの頭を抑えながらゆっくり辺りを確認しました。見たところ、誰も怪我をしていないようです。私は子どもたちに「動かないで」と囁き、窓へ近づきました。

砕けたガラス片の中に、短い円柱型の金属が幾つか混じっていました。缶詰か何かでしょうか。どうやらこれを投げつけられたせいで窓は割れたようです。

缶詰を調べようと手を伸ばしかけたそのとき、妙な臭いが鼻につきました。なんと表現すればいいのでしょうか、腐りきった魚のような、捨てられないまま真夏に数日間放置された生ゴミのような

そこまで考えたとき、その缶詰の一つがガラス片で破損し、穴が開いていることに気づきました。

まさか、これは　！？

「……シュールストレミング、だべ」

いつの間にか隣にいた、眼鏡を掛けた無愛想な北欧系と思われる男の子が呟きました。缶から漏れだす悪臭に眉一つ動かしていません。

シュールストレミング。スウェーデンで作られる、発酵したニシンの缶詰です。通常行われる殺菌がこの缶詰には一切行われず、そのため酷い時には缶が膨らむほどの悪臭が発生します。その臭いは

他のどの発酵食品にもひけをとらず、『世界一臭い食べ物』という異名を持つ食品です。

屋内、特に密室で開封すると大変なことになるのでほとんど輸出されず、二ホンではまずお目にかかれない食べ物なのですが……。

「何故、こんなところに？」

思わず首を傾げますが、今はそんな場合ではありません。少しずつ部屋が悪臭によって侵略されていきます。既に気分を悪くしている子どももいるようです。早く、この缶詰をどうにかしなければ！

「木蓮先生！ 子どもたちを避難させてください！」

「えっあつはいっ！」

頭をくらくらさせていた木蓮先生が子どもたちを連れていき、この部屋に残ったのは私と、子どもたちがいなくなって寂しそうな小藤先生と、それから隣の無愛想な子だけになりました。

……………て、あれ？

「べ、ベールヴァルド君！？ なんで残ってるんですか！？」

ベールヴァルド君 名前は、とっさに小藤先生の顔を見たら口パクで教えてくれました がしれつとした顔で立っているのに気づき、思わず声をあげました。

「食い物を粗末にする奴は、許せね」

それだけ言うと、ベールヴァルド君（長いですね、どう略したものでしょうか）は黙ってしまいました。あんな毒ガス兵器……もと凄まじい缶詰を食べ物と認めるなんて、この子はスウェーデン人なんでしょうか。

小藤先生はその横で、「やだ、かつこいい……」とかなんとか言っていました。違うでしょう、今はそんな場合じゃないでしょう。

そんなことをしている間にも、臭いはどんどん強くなっていきます。私はハンカチで鼻を抑えました。ベールヴァルド君にもハンカチを渡そうと思ったら、既に小藤先生がスカンジナビアクロス模様のハンカチを渡していました。どこに売ってるんでしょうね、ちょっと気になります。

とりあえず、穴の開いていない缶を取ってみました。生憎スウェーデン語を知らないのと書いてあるのかはわかりませんが、パッケージのニシンのイラストが、妙に禍々しく見えます。

もつと詳しく調べようと屈んだ瞬間、割れていなかった窓から「わーはははははははははははは！」と人が飛び込んできました。がっしょん、と再び散るガラス片。今日はよくガラスが割れる日です。

「な、なんでですかあなたはー」

なんかもう色々面倒になってきたので無視しようかと思いました  
が、流石に可哀想なので適当に反応してみました。

「わーははははは！ のとさま参上！ 恐れるおののけ恐怖しろー！」

赤いセーラー服を纏い、髪をポニーテールにした人物が、シュール以下略対策かガスマスクを装着して何かポーズを決めました。今年の最も関わりたくない人オブザイヤーが小藤先生からこの人に変更されるぐらいのインパクトでした。

「（小藤先生、なんですか、あれ）」

困ったときの小藤先生。

「あれ？ のとさま。男の娘。萌えキャラ。以上」

小藤先生の全く説明になっていない説明。……男の子？ え、あれ男なんですか？

「わーははははは、ってあれ！？子供いないじゃん、さらいに来たのに！」

わー、この人自分からカミングアウトしちゃいましたよー。いや最初から検討はついてましたけどー。

「くそ、こうなったらそこにいる眼鏡の子だけでもさらわないと、シールなんかを密輸した意味がない!」

そう言つて、大きな麻袋を広げてベールヴアルド君に飛びかかる不審者。いくらなんでもそんな凶行を許すわけにはいきません。私は懷にしまったスタンガンを取り出そうとし

「そおい」

「ぐえっ！」

すかさず不審者に腹パンを極めた小藤さんの活躍を見て、思わず手を止めました。

「まあ、のとさまは好きだけど、私はヘタキャラの方が好きなのよ。一ヘタリアファンとして、ヘタキャラ似の子どもを守らないわけにはいかないしね」

ダメージで動けない不審者にさらに何発かパンチを当て、さらに不審者が持っていた麻袋を被せる小藤先生。なんですか、この無双っぷりは。

被せた麻袋を不審者の腰の辺りできゅっと締め、ほとんど身動きが取れなくなつた不審者をなんと細腕で軽々と持ち上げ、そのままどこかへ去っていく小藤先生。何かが暴れるような物音がし、ジッパ―を閉めるような音がした後、何かをやり遂げた顔で戻ってきました。

「……テイクアウト、完了」

「何をしてきたんですか貴女は!？」

前言撤回、やっぱり関わりたくない人オブザイヤーは永久に小藤先生のです。

「いやあ、あの人月二ぐらいで来るんだけど、いつつも逃げられちゃうのよねえ。今度はしっかり縛ったから大丈夫だと思うけど……」  
……もしかしたら、私はとんでもない人と知り合ったのかもしれない。

ません。

「まあそれはさておき、今はガラスとこの臭いをどうにかしなくちゃね」

「ええ、そうですね」

と、ベールヴァルド君がそこで大きなあくびをするのが目に入りました。

「小藤先生、そろそろお昼寝の時間では？」

「あらいけない、もうこんな時間？ ほらベールヴァルド君、一緒

にお昼寝の部屋に行こっか」

「ん」

実に幸せそうな顔でベールヴアルド君の手をひいていく小藤先生。もう突っ込む気にもなれません。

割れた窓からは、部屋の臭いに不似合いな春の穏やかな風が吹き込みます。

こうして、私がここへ来て初めてのテロリスト襲来は、なんだかすっきりしない終わりを迎えたのでした。

……その後、あの不審者は『覚えてろよ』と書き置きを残し、脱走していたことが発覚しました。もう来なければいいのに。

## 普通テロリストはセーラー服を着用しません（後書き）

某キャラはうる覚えで書いた第六話です。ファンの方、本当に申し訳ありません。

前回から大分間隔が開いてしまいました。一ヶ月と一週間ぶりですかね。本当にすいません。

……冒頭から謝ってばっかだなあ。書くことあんないいからね。

最近あとがきのネタが切れ気味です。毎回短編が一個書けるほど書いてたら当たり前か。

もうね、三十回近くこんなあとがき書いてます。毎回毎回よくそんな書けるなと自分でも呆れます。

そろそろあとがきに飽きてきたので、次回のあとがきは書かないかもしれません。

……あとがきの愚痴はこれぐらいにして、そろそろ告知&募集に入りますよ。

この小説に出てくる保育士さん、及びテロリストさんのキャラを募集します。

最近気づいたんですが、この小説に出てくるオリキャラや強い女性しかいないんですね。

幼児の相手は体力勝負なんである種当たり前なんですが、それにしたってそんな感じのキャラしかないのは流石にどうかと。

そんなわけで、皆さんのお知恵をお借りしたいと思いました。

募集要項：特になし。年齢はとりあえず二十歳以上であればよし。具体的な口癖があると助かります。



もし何か面白いキャラを思いついたなら、是非リクエストお願い致します。

今回もご読了ありがとうございました。

寝顔は誰だって天使です（前書き）

コスモスさんもややするの巻

## 寝顔は誰だって天使です

窓ガラスの片付けと、部屋の換気と、窓の応急措置と……。

気づけばだいぶ時間が経ってしまいました。もう子どもたちはみんな寝てしまったのでしょうか？

私は箒とちりとりを片付け、お昼寝部屋へ様子を見に行くことにしました。

起こしてしまつては可哀想なので、気配や足音を出来るだけ殺し、引き戸をそつと開けました。

一面の布団、布団、布団、布団。まだまだ小さな子どもたちが、それぞれ個性のある寝相で寝息をたてています。

子どもは天使とはいいますが、確かにこんな穏やかな寝顔を見ると、その通りだと思つてしまいます。

そんなことをしみじみ思っていると。

「……んう……ふえ……おじいちゃん……！」

悪夢でも見てしまったのか、誰かが泣き出してしまいました。あの声は確か……フェリ君だったでしょうか？ 相変わらずよく泣く子ですね。

ともかく、泣き止ませないわけにはいきません。私は声の聞こえるほうへ忍び足で向かいました。

「わ、フェリちゃんどうしたのう？ 何かこわーい夢でも見ちゃったかなあ？」

と、私がフェリ君の元へ向かう前に、誰かが彼に話しかけました。

「ふ……え、ゆうかせんせ……」

「そーだよう、ぬーべーとGS美神についつい共感しちゃうことで有名な優華先生だよ」

声の主 優華先生はフェリ君を抱き上げ、背中をぽんぽんさすります。

「あのね、おじいちゃんがね……」

「おじいちゃんがどうしたの？ 大丈夫だよ、怖い夢なら優華先生がぼーんとなんがちよしちゃうからねえ」

「うん……」

「ぼーんとなんがちよ」って一体何をするんですか、という私の困惑とは裏腹に、フェリ君は優華先生にさすられるまま泣き止み、そのまま寝てしまったようでした。

「……あ、あれえ！？ こここコスモスさん、いいいいんですかあ！？」

優華先生は私に気づくと、先程とは一転した激しい動揺を見せました。

「ええ、まあ。それにしても凄いですね、あんなに早く寝つかせられるなんて」

人に何かを訊きたいときは、いきなり本題に入ってはいけません。特にこのように心のバリエードを張り巡らせている場合は、軽くジヤブを打ってから、「ぼーんとなんがちよ」について問いただす機会を窺うのです。

「そ、そんなことないですよ。白木先生とか、もっと凄い先生だっていますよう。私なんてまだまだです」

……… なんてこの人、こんなに挙動不審なんですかね。まあどうでもいいですが。

「そうですか？ 貴女もそれなりだと思いますが……。ところで」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああ」

私が例の件について言及しようとしたとき、優華先生は突然私の後方を凝視しながら絶叫しました。

「ゆ、優華先生！？ どうしたんですか！？ そんなに大きな声出したら子どもたちが起きてしまいますよ！？」

「……え、あ、いやあ、その……… すいません、私ちよつと用を思いたしちゃって…… 子どもたちのこと、よろしく願いしますっ！」

言うが早いか、優華先生は小走りで部屋から出ていってしまいました。なにやら、切羽詰まった様子でしたが……。

「……一体なんなんでしょう？」

しかし、それからの私は、優華先生の叫び声で起きてしまった子どもたちのお世話で奔走することになり、結局「ぽーん」とえんがちよ」や優華先生の奇行の意味はわからずじまいでした。

「いやあああああつ！ お兄さまが、お兄さまがあああああつ！？」

「兄さんはどこだ！？ 兄さんを出せえええええええ………！」  
「帰ってえええええええええええ………！」

「うわああああん！ おばけだあ！ トウースキュアリーだよおおっ！」

「ちくしょー助けるアントーニョー！」

「皆さん落ち着いてください！ 私がいますから、とりあえずもう叫ばないで………！」

部屋を埋め尽くす泣き声に鼓膜をやられながら、ふと思いました。  
……いくら寝顔が天使でも、中身も天使だとは限らないものですね……。

## 寝顔は誰だって天使です（後書き）

九條さんお許しください！

そんな感じの第七話です。すいません。

今回登場した優華先生は、九條成瀬さんからのリクエストを採用させていただきました。

九條さん、本当にありがとうございました。そしてすいません。初っぱなから崩壊気味ですいません。本当にすいません。

そんなわけでリクエストですが、まだまだ募集させていただいています。もしよかったら応募してやってください。

あと誰かこの幼稚園の正式名称考えてくれませんか？

それにしても最近、「へたりあようちえん」なのにちつともヘタキヤラ活躍してないなあ。

ていうか、時間軸ではまだ一日経ってません。どうなんだこれ。一日長すぎだろ。

多分次回あたりでお迎え編やって、それから一日一話方式になると思います。これ以上一日が続いてたまるか。

それでは、また次回もお会いできたら幸いです。

想定外のお迎えですね（前書き）

コスモスさんやりきれないの巻

## 想定外のお迎えですね

……思えば、長い一日でした。そう、まるでもう何カ月も経ったような。

しかし、もうそれもおしまいです。ようやく……ようやく！ お迎えの時間が来たのですから！

……だけど、一体どうするんでしょう。聞くところでは、この幼稚園は各国の要人の子女を集めているそうですが……一体、子どもたちをどう帰すのでしょうか？

そんな私の疑問を見透かしたように小藤先生が言いました。

「大丈夫よ。子どもたちはみんなお家へ帰るから」

「はあ……でも、どうやって？」

「見ればわかるわよ。もうすぐ送迎用の……」

小藤先生の言葉は途中でわからなくなりました。何故なら。

バラバラバラバラバラバラバラバラ……

「な、なんですかあのへりは！？」

お庭の上空に、爆音と共にプロペラを回す一機のヘリコプターがホバリングしていたからです。

「ああ、やっと来たわね。ローマ爺ちゃん……もとい、ヴァルガスさん」

一見緊急事態なのに、落ち着いた小藤先生の声。それに応えるかのように、ヘリが緩やかに庭に着地し、中から一つの影が出てきました。

それは、茶髪のかなり体格が良い男のようでした。おそらくはラテン系の欧米人でしょう。スーツをきっちり着こなした姿でしたが、その表情はまるでいたずらっ子のようでした。

私は、その男性をどこかで見た覚えがありました。しかし、どこだったのか……そういえば、小藤先生が先程彼のことを『ヴァルガ



スさん』と呼んでいたような……。

……まさか？

「ヴァルガス財団総帥……？」

ヴァルガス財団。説明は面倒なので省きますが、絶大な権力やら富やらを持ち、イタリアを裏から牛耳るといわれる悪の組織っぽい団だと思ってください。平たくいえばある種のマフィアですね。

で、あの男性は、やたら若いことで有名なヴァルガス財団の首領。名前は……忘れましたが、年齢は確か七十歳ぐらいはありましたか。「な……なんであんな超絶VIPがこんなところに……」

「そりゃあ保護者だからよ。フェリ君とロヴィ君の」

事も無げに言う小藤先生。マジかよ……げふんげふん、マジですか。

「おつなあ姉ちゃんたち！ 俺の可愛い孫たち出してくんねーかな？」

と、ヴァルガス翁は私たちに気さくな様子で話しかけてきました。姉ちゃんって、貴方のほうがよほどオールドでしょうに。

「はいはい、今連れて来ますね」

小藤先生はにつこり笑って部屋に行き、やがてフェリ君とロヴィ君（フェリ君の兄。フェリ君より若干生意気）を連れてきました。

「それじゃあフェリ君、ロヴィ君、また明日ね」

「うん！」「……うん」

「今日もありがとうな！」

そう言うつと、ヴァルガス翁は両腕それぞれにフェリ君とロヴィ君を抱え、ヘリに乗り込みました。

そして、ヘリは再び上空へと去っていきました。

「……あの、小藤先生」

「何？」

「子どもたちの送迎って……どうするんですしたっけ？」

「ああ、特別に送迎用のジェット機があつて、それを使うのよ」

「……そうですか……」

私は、何かもういろいろとやりきれなくなり、空を見上げました。  
空には、二本の飛行機雲を作るジェット機が。

「なんていうか……もう、ひどい話ですね」

何がひどいのか、自分でもよくわかりませんが。

想定外のお迎えですね（後書き）

Q・いくらジェット機でも世界中を廻るのは時間かかるよね？

A・あれはコンコルドだったんだよ！

Q・いくらヘリコプターでも（ry

A・ヴァルガス財団特注の云々かんぬんだったんだよ！

Q・全体的にひどくね？

A・本当に申し訳ありません！

次回からは一日一話みたいな感じになりますよ。

桃太郎は生まれたときから強かったんですね（前書き）

コスモスさん絵本を読むの巻

## 桃太郎は生まれたときから強かったんですね

今日は、『桃太郎』という絵本の読み聞かせをすることになりました。

「むかし昔、あるところに」

「先生、昔っていつの時代ですか？　あるところとは具体的にどこなんですか？」

私を知るわけないでしょう。ルート君は真面目ですけど変なところで融通が利きません。

「……室町時代、今でいうところの岡山県の某所に、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に」

「先生、芝刈りってなんだい？　おばあさんはどうして洗濯機を使わないんだい？」

「芝刈りは芝刈りです。室町時代に洗濯機はありません。おばあさんが川で洗濯していると、川からどんぶらことどんぶらこと大きな桃が流れてきました」

「川に物を捨てちゃいけないんだぞ！　環境破壊だ！」

「昔は今より自然が多くて条例も緩かったんですよ。びっくりしたおばあさんは慌てて桃を持ち帰り、おじいさんがそれを切ってみると、中から赤ちゃんが出てきました」

「先生、なんで桃を切ったのに赤ちゃんは切れなかったあるか？」

「サムライだからシラハドリしたんじゃないでしょうか。おじいさんとおばあさんはその赤ちゃんを、桃から生まれたから『桃太郎』と名づけ、大切に育てていきました」

「先生、いくらなんでもそのネーミングセンスはひどいと思うな」

「赤ずきんとか灰かぶりとかよりはマシでしょう。やがて、桃太郎は立派な男の子に成長しました。ある日のことです。桃太郎は、都で鬼が暴れて宝物を奪っていく、といううわさを耳にしました」

先生、鬼なんているはずないだろ。何いってんだ？」

「妖精がいるなら鬼の一匹や二匹いてもおかしくありません。桃太郎は鬼ヶ島へ行き鬼を退治することにしました。おばあさんは桃太郎のために、一つ食べれば元氣百倍になるきびだんごを作り、桃太郎に持たせてあげました」

「先生、それってバイアグら」

「黙らっしゃい。桃太郎が鬼ヶ島に向けて歩いていると、犬、猿、キジが現れ、桃太郎のきびだんごを欲しがりました。桃太郎はきびだんごをあげるかわりに、三匹にお供になつてもらいました」

「……熊や牛ならともかく、そんな動物がなんの役に立つん?」

「野犬に襲われて二ホンザルの集団に囲まれてキジの凶器のごとく鋭いくちばしにつつかれてから言いなさい。桃太郎と三匹は鬼ヶ島に上陸しました。襲いかかる鬼たちもなんのその、桃太郎は刀で鬼をばっさばっさと斬り、三匹は噛み、引つ掻き、つつきの大暴れ。しまいには全ての鬼が降参してしまいました」

「桃太郎TUUUUUUUUUU!!!」

「はいはい桃太郎。そうして桃太郎は宝物を取り返し、奪われた人に返してあげました桃太郎は都の人に感謝され、街一番の美人と結婚させてもらいました。三匹も沢山活躍したのでごちそうをたらくく食べさせてもらいました。桃太郎は都におじいさんおばあさんを招き、末永く幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし」

「先生、この話の教訓はなんですか？」

「そうですね……」  
「勸善懲惡、っていうか桃太郎鬼叩きのめす以外善やってないじゃねえか」  
「ってところでしょか」

「先生、それうp主の感想じゃないんですか？」

「気のせいですよ、多分」

桃太郎は生まれたときから強かつたんですね（後書き）

桃太郎。

実はこの小説を続けるべきか悩んでいます。  
誰か助けてください。

ピカソの絵が下手だと思っ方ちょっと来てください（前書き）

コスモスさん個性的な絵を見て絶句するの巻



ピカソの絵が下手だと思う方ちょっと来てください

今日は、みなでお絵描きをすることになりました。お題は自由。子どもたちはどんな絵を見せてくれるのでしょうか。

「イヴァン君が描いているのは……ひまわり、ですか？」

「うん。僕、ひまわりが大好き」

イヴァン君が描いていた絵は、画用紙いっぱいには大小様々なひまわりが咲き乱れたものでした。

「いつか世界中をひまわりでいっぱいにするのが僕の夢なんだあ」

「それは素敵ですね。頑張ってください」

「うん！」

子どもの夢は純粹で素敵ですよ。去り際にイヴァン君が、「いつかみいんな僕の家……」と歌っていたような気がしますが、多分気のせいでしょう。

「ヨンス君は何を描いてるんですか？」

「もちろん、俺の国なんだぜ！」

ヨンス君がばつと広げた画用紙には、太極旗、いわゆる韓国の国旗が描かれていました。

「……なんというか、その、円が上手に描けてますね」

「だろ！？　なんだぜ！」

ときどき、本当にときどきですが、この子の将来がひどく不安になります。

「菊君は……いつも通りですね」

「私の嫁です」

緑色の髪をツインテールにした女の子の絵でした。クレヨンだけでアニメの絵を完全に再現する才能は凄いとは思いますが。

「シナティちゃん！　シナティちゃん！　可愛いあるー！」

「……まあ、ここまで似てなかったら、版權にも引っ掛からないですよ」

既視感がありますが、ぎりぎりセーフだと信じます。

「兄さん兄さん結婚結婚兄さん兄さん兄さん兄さん兄さん結婚結婚結婚結婚結婚兄さん兄さん結婚」

「結婚はせめてあと十年待ってからしてください……」

画用紙一面にイヴァン君の似顔絵と『結婚』の文字……誰かこの子をなんとかしてあげてください。私には無理です。

「山羊を描いたのである」

「あら可愛い。バツシュ君は動物が好きなんですか？」

「お兄様を描きました」

「上手ですが……なんでバツシュ君は女の子の服を着てるんです？」

目がキラキラしてる子にはなかなか注意しづらいですね。ともあれ、兄妹仲が良さそうで何よりです。

「小鳥のようにかっこいい俺様ー！」

「もう小鳥を描いたらいいんじゃないでしょうか」

（僕はクマさんを描いたよ……）

「知ラナイ人、描イタ」

「……何故、園内に熊が……あれ？ 今、誰か何かいました？」

「ヴェー、見て見てー、爺ちゃん描いたよー」

「このバカ弟！ なんで俺と同じの描くんだよ！ コノヤロー！」

「ヴェッ！？ ご、ごめんなさい……」

「こらこら、兄弟喧嘩はやめなさい」

「俺は妖精さんを描いたぞ」

「わー、夢が溢れてますねー（棒）」

「zzzz……」

「ヘラクレス君、今はお昼寝の時間ではありませんよ」

ふう……題材はちよつとアレなのが多いですが、みんな真面目に描いているみたいですね。ちよつとアレなのが多いですが……

「……あれ。フェリクス君、何を描いてるんですか？」

フェリクス君の絵は、絵というよりは画用紙をただピンク色に塗っているだけのように見えました。

「ピンクって超可愛くない？ だからピンクを描いてるんよ」  
「.....」

.....もつやだこの幼稚園。

ピカソの絵が下手だと思っ方ちよつと来てください（後書き）

どんな絵を見ても決して否定せずに褒めて伸ばそうとする先生たちは凄いです。

ヒーローは孤独なものだと相場が決まっていますが（前書き）

コスモスさん特に何もしないの巻

ヒーローは孤独なものだと相場が決まっていますが

今日は特にやることがなかったので、子どもたちがどんな遊びをしているか観察することにしました。

庭の中央辺りを見ると、何人が集まって何かしているようでした。一体どんな遊びなのでしょう。

「ヒーローごっこするものこの指止ーまれ！」

最初に高々と人差し指を掲げたのは、銀髪と赤い眼が目立つギルベルト君でした。

「おー、ええな！ 俺やりたい！」

「じゃあお兄さんも」

そしてギルベルト君の元へ二人の子が。やや色黒なほうがアントーニヨ君、ウエーブがかった金髪の子がフランシス君でしたか。

「面白そうじゃねえか。俺もやるぜ」

「わーい、僕もやるー」

さらに、亜麻色の長い髪をゆるく結んだエリザちゃん……エリザ君と、女の子みたいな容姿をしたフェリ君がやって来ました。

「俺入れて五人か。結構集まったなー」

よしよし、とギルベルト君が頷く。

「じゃ、グーチーでわかれんぞー」

「おー」

グーチーとはジャンケンの一種で、グーとチョキだけを出して二組に分かれるためのものです。グッパーとかパーチョキとか、地域によって微妙に名称が異なるとか。

「せーのっ、グーチーグーチーグーチージャス！」

ギルベルト君のかけ声でいつせいに手を出す子どもたち。内訳は、グーがギルベルト君、エリザ君ちゃん。チョキがアントーニヨ君とフランシス君でした。フェリ君はパーを出したので除外。

「間違えちゃった……」

「しょうがねえなあ。じゃ、フェリちゃんはお姫さま役な！」  
「うん！」

なんでしょう。とんでもない突っ込みどころをスルーしてしまったような気がします。

「ヒーロー役は譲らねえからな」

「奪い取ってみせるさ、この拳にかけて」

ギルベルト君とフランス君の、およそ園児がやるとは思えない熱いやり通りの後、ヒーローの座をかけてジャンケン。

「ジャン、ケン　ポン！」

フランス君が出したのは　パー。対してギルベルト君は

「ま……負けた……俺が……」

「へっ！　俺がグーしか出さないと思ったら大間違いだぜ？」

ギルベルト君の手はチョキ。この勝負、ギルベルト君の勝ちですね。

「じゃ、俺たちがヒーローでお前らが怪人な」

「しょうがないな……」

「俺は構わへんよ」

そして子どもたちは二手にわかれしました。フェリ君がどうしようどうしようとおろおろしてましたが、アントーニヨ君に「お姫さまやから悪者に捕まってるんやで」と手を牽かれていきました。

そしていよいよヒーローごっこが始まります。

「はーははは！　ついに捕まえたぞ、アドリアーナ姫！」

「きやあゝたすけて」

「だめやでゝもう逃げられへんで」

結構ノリノリなフランス君と、いつもと全く変わらないアントーニヨ君。フェリ君は……男にしておくにはもったいないくらいのお姫さまっぷりです。

「そこまでだ！　怪人ども！」

「なっ、誰だ！？」

と、上の方から声が。見ると、太陽をバックにジャングルジムに

仁王立ちする二つの影が。

「とうっ！」

勇ましい掛け声と共に飛び降りて来たのは、今更説明することでもないですが、ギルベルト君とエリザ君ちゃんでした。

「正義のハートが悪しきを絶やす！」

「頭の小鳥が燃えろと唸る！」

「「大鷲戦士オレサマン、参上！」」

ポーズを決める二人の後ろで、どーんと爆発が起きました。どこからそんな火薬が出たのでしょうか。

……それにしても、園児のセンスにケチをつけるわけではないですが、大鷲戦士オレサマンはダサイと思います。

「現れたなオレサマン！」

「返り討ちにしたるで！」

そしてノリノリな怪人勢。フェリ君そっちのけで戦闘が始まります。

「怪人へんたい男は俺がやる！ 怪人トメイトウ男は頼むぜ、バーディー！」

「おう！ 任せとけ、マニッシュ！」

なるほど。どうやらエリザちゃんくはオレサマン・マニッシュ、ギルベルト君はオレサマン・バーディーという名前という設定らしいですね。そこらへんのネーミングセンスがわりと的を射ているのが逆に腹立たしいです。

「ていつ、らあっ！」

「やったな、このお！」

「喰らええっ！」

「ちよっ、フライパンは反則！」

……文字にするとまるで本当に戦っているみたいですが、実際はただの園児のじゃれあいですからね？ そこは間違えなくてください。

一方そのころフェリ君は。



「み、みんなやめて」。僕のために争わないで」

……もうドン引きするくらいお姫さましてました。

「待ってるよ、フェリちゃん！俺が必ず助け出してあげるからな！」

「ちゃうで！フェリちゃんを助けるのは俺や！」

「いや、お前怪人だろ！？」

「なんでもいいからフライパンは使わないで！ほんとお願い！」

「どさくさに紛れてどこ触ってんだよ！」

「バレたー！」

皆さん刮目してご覧ください。これが、一人の男児を巡って争う四人の園児の姿です。そのうち一人は女の子ですが。

……これが中高生以上だったらいろいろあぶない光景ですね。いかにも小藤先生が好きそうなシチュエーションです。

私は溜め息をついて椅子から立ち上がりました。

「こら、喧嘩はやめなさい」

「……喧嘩じゃない！」「」「」

「はいはい」

私はやはり、黙って見ているより積極的に関わる方が性にあうようです。

ヒーローは孤独なものだと相場が決まっていますが（後書き）

最近特撮にハマりまくってひゃっほうしてたらこんな内容になりました。

オレサマンの元ネタは逆転裁判のトノサマンです。実写映画化おめでとう！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6855o/>

---

へたりあようちえん。～世界がもし一つの幼稚園だったら～

2011年6月5日13時40分発行